

福島浜通りの復興と地域づくり活動 ～東日本大震災と原発事故を乗り越えて～

平成28年 2月 6日



NPO 法人ハッピーロードネット
理事長 西本 由美子

1

NPO法人ハッピーロードネットのご紹介

◇活動の目的

福島県浜通り地域の「まち」「みち」「地域づくり」に関するコーディネートや人的ネットワークづくり、地域の未来を担う人材育成などの事業を行い、楽しく住みやすい地域社会の実現に向けて活動しています。

- ・平成17年 交通安全母の会から「地域づくり団体」を結成、活動を開始
- ・平成20年 「特定非営利活動法人 ハッピーロードネット」設立

◇主な活動

(震災前)

- ・「こどもといっしょに未来のまちを考えるフォーラム」の開催
- ・国道6号ほか「ゴミ拾いボランティア」活動、「植栽・維持管理」活動の実施
- ・Jヴィレッジの植栽・管理や韓国ナショナルトレセンU14との交流活動
- ・常磐道(楡葉PA)「高校生といっしょに設計懇談会」の実施・支援活動
- ・「U-20が未来をつくるハイスクールサミットin東北」の開催
- ・福島県内や三重、岩手など各自治体の教育委員会懇談会等の支援 など

(震災後)

- ・東日本大震災による被災者の支援活動
- ・「ふくしま浜街道・桜プロジェクト」ボランティア植樹(維持管理)活動 など

2

東日本大震災の発生

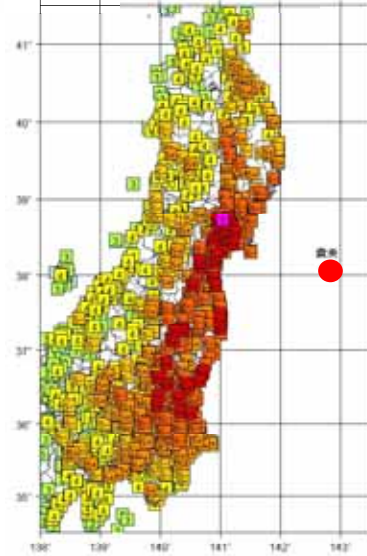
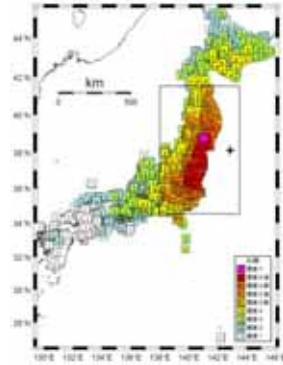
■ 1,000年に1度といわれる規模の**大地震**と**大きな津波**が発生

平成23年3月11日(金)14時46分

発生場所: 北緯38度06.2分、東経142度51.6分、
深さ24km

規模: 9.0(モーメントマグニチュード)

最大震度: 7



3

多くの生命と財産を奪った津波



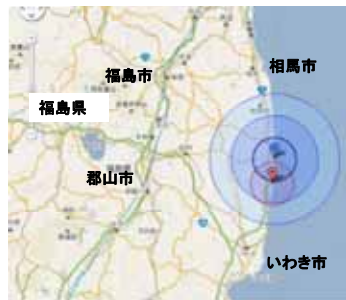
4

地震・津波の被災状況 (H23年3月)



5

原発事故による避難の動き



- H23.3.12 1号機爆発
~20km圏内: 避難指示
- H23.3.14 3号機爆発
- H23.3.15 2号機損傷、4号機爆発
~30km圏内: 屋内退避指示
- ◇ 放射能拡散の恐怖
パニック状態、物流ストップ



6

原発事故の状況 (H23年3月)

(写真:東京電力)

福島第一原子力発電所



福島第一原子力発電所 1～4号機



福島第一原子力発電所 3号機



福島第一原子力発電所 4号機注水作業



7

除染廃棄物の仮置き場 (H27現在)

- 除染後の指定廃棄物は、仮置き場に一時保管され、県内の中間貯蔵施設「長期管理施設」等に運搬される。
(平成27年から、仮置き場から中間貯蔵施設への試験運搬が開始されている。)



写真 (H28.1月)

- ※ 事故によって大気中に放出された放射性物質に汚染された廃棄物のほとんどのものは放射能濃度が低く、一般の廃棄物と同様の方法で安全に処理できる。
- ・ 一定濃度 (1キログラム当たり8,000ベクレル) を超え、環境大臣が指定したものは、指定廃棄物として、国の責任のもと、適切な方法で処理することとなっている。

8

津波による被災地の復旧・復興(H27現在)

■ 防災集団移転団地等の整備

・津波危険区域から、新たに整備した団地への集団移転や、住宅の建設が進んでいる。

■ 災害公営住宅の整備

・被災者は、応急仮設住宅から災害公営住宅や恒久住宅へ転居が進んでいる。
・浜通りの市町村では、応急仮設住宅の撤去も開始されている。

▲いわき市
(小名浜地区)



▼南相馬市(南海老地区)



▼相馬市(尾浜地区)

9

(復旧・復興) 国道6号の再開通・常磐道の全線開通

■ H26.9月、一般車両は通行止めとなっていた国道6号が再開通

→ 約3年半ぶりに再開通し、国道6号が自由に通行できるようになった。

■ H27.3月、常磐道の浪江IC～富岡IC間の開通により、全線が開通

→ 常磐自動車道は、東京～福島浜通り～仙台と結ばれ、復興が加速。



10

(復旧・復興) JR常磐線の再開通

■鉄道(JR常磐線)について、運転再開通の見通し公表(H27)

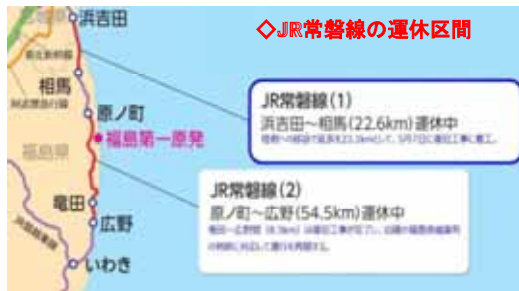
◇JR常磐線の相馬～浜吉田間の移設計画 (内陸に移設)



◆JR常磐線 再開通の見通し

- ・浜吉田～相馬 H28秋
- ・相馬～原ノ町 再開通済み
- ・原ノ町～小高 H28春
- ・小高～浪江 H29
- ・浪江～富岡 (除染に着手)
- ・富岡～竜田 H30

▲東部幹線移設計画(2023年4月現在)



▲JR再開通に向け除染中の浪江駅

11

被災者への支援活動 (震災直後H23.4～5月)

- これまでの人ネットワークにより、全国から支援物資を調達、日本サッカー協会を借りて整理
- (財)日本サッカー協会や協賛企業の協力を得て、**集団避難所へ支援物資を届ける。**
- 子供たちが避難している**サテライト校に、文房具(13トン分)などの支援物資を届ける。**



▲大熊町集団避難所(会津若松市内)
(財)日本サッカー協会 大仁会長(右端)と物資を届ける



▲平成23年5月26日
双葉高校サテライト校
(いわき市)に支援物資を届ける



▼平成23年5月27日
相馬農業高校サテライト校
(南相馬市)
に支援物資を届ける



▲平成23年5月30日
福島民友



▲(財)日本サッカー協会を借りて、支援物資を整理

12

「ハイスクールサミットin東北」の再開

子供たちに、大人や社会への意見を提言する機会を提供し、子供たちが自主的に社会活動に参画することを目的として、平成18年1月から実施しているフォーラムは、震災後も実施。

- ・平成24年1月20～21日 仙台市で開催 (H23開催延期→ 震災後の再開)
- ・平成24年7月31日～8月1日 仙台市で開催
- ・平成25年8月23～25日 仙台市で開催
- ・平成26年8月8～9日 いわき市で開催 (記念すべき第10回大会を迎えた)



13

サミットの運営は高校生、高校OB・大人がサポート

▼前日の高校生の交流会 ▼ワークショップ後、フォーラムで発表 ▼司会やサミットの運営も高校生



▲全国から参加した高校のPRポスター



▲福島民報 平成25年8月9日(3面)

14

「ふくしま浜街道・桜プロジェクト」活動



- 震災後、希望をなくしつつある福島浜通りの住民に元気と希望を与えるため、『ふくしま浜街道・桜プロジェクト』を立ち上げた。
- いわき市から新地町までの国道6号と沿線の区市町村道に桜の苗木を植樹し、福島浜通りの未来を担う子供たちが住民の一人として主体的にこのプロジェクトに関り、「愛するふるさとの復興」を作り上げていく礎となるよう、復興のシンボルとして二万本の桜並木を目指して活動。
- 植樹費用や維持管理(除草・施肥・防除等)は、全国を対象としたオーナーやボランティアを募集しており、誰でも桜1本分の「オーナー」になればメッセージと名前が書かれたプレートが掲げられる。



▲桜の苗木を植栽

▲維持管理するオーナー

15

第1回ハイスクール世界サミットinふくしま (H27.8.6~9)

『福島から発信する私たちの夢』をテーマに、18都道県25校54名の高校生に加え、10ヶ国18名の海外の高校生が未来のエネルギーと福島のまちづくりについて議論。(サミット運営は、高校生のほか、OBの大学生がサポート)



ワークショップ



子供たちの交流会

16

サミットの運営も、人材育成として取り組む

▼磐城高校放送部 インタビュー取材



安倍昭恵 総理大臣夫人に取材

▼現地視察のエスコート



▼サミット進行の最終打ち合わせ



司会は、地元高校生

■OB大学生活動報告(道の駅プロジェクトチーム)

道の駅ひろの(計画)



広野町役場や国土交通省に赴き、現地見学、勉強会、関係者との意見交換をする事ができた。このプロジェクトを通して、自分達の考えが実現する機会をいただいた。「道の駅ひろの」が復興のシンボルとなって、多くの方に双葉郡を知ってもらいたい。早稲田大学4年藤井さん



東北大学4年日置さん



早稲田大学4年藤井さん

▼反省会、次回開催に向けての打ち合わせ (H27.12.3)



大会顧問である安倍首相夫人も参加、「ハイスクール世界サミットin福島」の報告会と第2回大会へ向けての打ち合わせを実施。今回の反省点や改善点などを抽出、来年更にグレードアップしたサミットを目指し、様々な意見が出されました。なによりも運営の中心を担う大学生スタッフのとてもしっかりした意見が素晴らしい。(大きな成長)



17

「清掃ボランティア活動」の復活(H27.10.10)

- 「みんなでやっぺ!!きれいな6国」ボランティア活動は、東日本大震災の影響により休止していたが、地域の子供たちからの活動再開の要望を受け、5年ぶりに復活した。
- いわき・相双地区の高校生が主体となり、青年会議所や住民・企業の方々の協力により、約1,400人が参加、いわき市～新地町間の国道6号沿道の清掃活動を実施した。



【8区間、約50kmを清掃】



18

放射線の正しい知識と風評被害対策

- 清掃活動に対して、誹謗(ひぼう)中傷の電話やメールなどが寄せられた。
- 必要以上に放射線被曝(ひばく)を恐れる人々による、子供たちの思いを踏みにじる中傷行為に胸を痛める。
- 掃除活動した国道6号の区間は、主に子どもたちの通学路となっている箇所。
- 浪江町や富岡町の比較的線量の高い地区は、大人たちの担当エリア。前もって放射線量を計って安全性は確認済み。

◆ 一番の被害は放射線自体よりも、誤った情報による被害。

- 正確な情報が伝わる前に、メディアから個人まで広範囲に誤った知識が広まってしまうと悲劇が起きる。
- 放射線に対する正しい情報提供や教育を充実するなど、正しい知識を持って行動することが大切。



※(専門家によると) 例えば、飛行機で成田とニューヨークを搭乗した時の被ばく量は100マイクロシーベルト程度であり、同じレベルの被ばくをするには、福島原発付近の国道6号を50回以上も通過するレベルとのこと。
(100マイクロシーベルト = 胸部レントゲン(約50マイクロシーベルト/回)の2回分相当)

19

被ばくりスクは、誇張され過ぎていた

【子どもがセシウムを吸い込む“被ばくイベント”が福島で決行された！】『女性自身』11月10日号。「福島の中高生たちが、福島第一原発のそばも通る国道6号線を清掃するイベントに駆り出された。復帰をアピールしたい大人たちに使われて、子どもの健康を、守られるのか。」



【2015.12.20 産経ニュース】

東京電力福島第1原発事故以降、放射線被曝リスクに対し、過剰に恐れる極端な反応もみられ、混乱と迷走を続けてきた。そうした中、米有力紙ウォールストリート・ジャーナル(WSJ)が12月3日付で、「原子力のパラダイムシフト」と題して、被曝リスクは誇張され過ぎているとした上で、「われわれはどれほど愚かだったのか」と自戒する記事を掲載した。その理由と背景は何か。被曝リスクについて振れ過ぎた針を戻す試みが、海外から出てきている。(原子力取材班)



「われわれは愚かだった」と被曝リスクについての報道を反省するウォールストリート・ジャーナルの記事

福島のタブーに挑む・その2被ばくデマ・風評被害の根絶

澤昭裕・2016年への提言(中篇)2015年12月27日 澤昭裕(国際環境経済研究所所長)

むしろ問題は、現地よりも福島県外の人々の放射線リスクに関する知識や情報レベルにある。いまだに福島県は「住める場所ではない」とか「逃げるべきだ」などと煽りを繰り返している「市民運動団体」が存在している。福島を救うような顔をしながら、実際には復興を妨げ、地元住民の心の傷に塩を塗りこむような活動を行っている勢力に屈することがあってはならない。これは原子力推進か反対かとは別次元であり、人間としての品格(integrity)の問題として捉えられなければならない。

20

櫻井よしこ氏講演会の企画・開催 (H27.12.20)

- 東日本大震災と福島第一原発事故からの復興に向け、福島の双葉地区の将来を考える講演会を企画し、福島県広野町で開催。(講師は、ジャーナリストの櫻井よしこさん)
- 福島大学特任研究員の開沼博氏をコーディネーターとし、復興への思いを語り合う。

21

2020東京オリンピック聖火リレーを浜通りへ誘致活動

- 東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長は、平成26年6月17日福島県庁で県内聖火リレーのコース設定で、福島浜通りを縦断する考えを示した。
- 聖火リレーを通して東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興を世界に発信していく。

▲森組織委員会会長と
佐藤福島県知事(当時)

22

子供の地域社会活動の参画に際して大事なこと

①子供たちの自主性を尊重する。

- ・子供たちの意見を取り入れ、自分から参加する意欲を認め、また、自主性を引き出していく。

②無理をしない。

- ・子供たちは、学校生活やクラブ活動などそれぞれの生活がある。参加できるときに参加してもらい、長く続けることが大事。

③活動成果(満足感)を求める。

- ・子供は欲望のかたまりみたいなもの、遊びの中からも何かを得る。
- ・活動して結果や成果を出し、形にして残すこと。満足度の向上を図る。

④大人がやってみせる。

- ・子供はよく見ている。地域の大人(親)が何をやっているのかを。
- ・口先だけではダメ、一緒に取り組むことが良い見本になる。

◇「継続」することの難しさ、大変さ、大切さ

→「誠実な活動」と「周囲への理解促進活動」により克服

23



私たちは、愛するふるさとの復興を願う子供たちに、元氣と希望を与え、福島浜通りの復興と活性化を目指します。



<http://happyroad.net/>



@hamakaidosakura



24